

[研究ノート]

わが国のソーシャルワーク実践と 文化的特性に関する一考察

齊 藤 順 子^{※1}村 上 信^{※2}

Key words：ソーシャルワーク実践，ソーシャルワーカー，文化風土

はじめに

ソーシャルワークは、何らかの生活上の課題に直面している人々に対して、その課題の解決やニーズの充足を通して、人々の主体的な生活を支援する方法と実践活動である。そこには、連綿と続く人々の生活とその生活に影響を及ぼす生活様式や文化、価値基盤への視点が求められる。欧米（主に北米）の人々の生活様式や文化、価値基盤のもとに醸成され、発展してきたソーシャルワーク理論は、わが国のソーシャルワーク教育の主軸として導入されてきたが、一方、生活様式や文化、価値基盤の異なるわが国での検討の必要性について指摘されている（今泉2003: 39, 空閑2013: 70, 岡本 2014: 3）。

2014年に採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」では、従来のソーシャルワークの定義に各地域・国の文化や社会状況に沿った定義の展開が加えられた。しかし、生活様式、文化、価値基盤は人々に無意識に根付き、共有化され、伝承されているためにそれらを検討する手段が必要となる。

本稿ではソーシャルワーカー（以下 SWer）の実践活動に着目し、二人のSWerに行ったインタビュー調査をもとに、実践活動の分析を通して、わが国の文化的特性について考察をする。Ⅰ・Ⅱを齊藤が、Ⅲを村上が執筆した。

Ⅰ 近畿地方のSWer A氏・B氏へのインタビュー調査から

筆者らがインタビューを行ったA氏・B氏は、近畿地方の県北部に位置するそれぞれ人口約

※ 1 淑徳大学総合福祉学部教授

※ 2 東北師範大学人文学院福祉学部教授

8万人（高齢化率：31.7%）、2万人（高齢化率：36.7%）の地域で実践を行っている¹⁾。筆者らが選択した理由は、A氏・B氏が、グローバル化、都市化が進む日本社会にあって、主な産業が農林水産業であり、伝統的な地域のつながりが残っている地域で実践しているからである。

SWerの「キャリアと業務」「地域性のとらえ方」「地域での実践活動」「支援困難事例」を中心に半構造化面接を行った。

インタビューは、齊藤、村上が実施し、実施期間は2018年3月27日、時間は1人平均1時間半から2時間である。インタビュー内容について、音声データを文字に起こし、齊藤・村上で確認を行った。「」のポイントの小さい文字はSWer自身の言葉である。

倫理的配慮については、日本社会福祉学会の倫理規定に基づき、調査の目的、個人情報の取り扱いを書面にし、口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。

1. A氏の実践活動

【A氏のキャリアと業務】

A氏は、地域活動支援センターの所長である。大学の社会福祉学を専攻、ゼミでホームレスや高齢になった元日雇い労働者の調査経験があり、大都市の在日高齢者が多数入居する特別養護老人ホーム、労働福祉センターの非常勤、精神科クリニックに7年勤務し、地元の地域に初めての精神障害者の社会復帰施設が創設されると知り、2005（平成17）年から勤務している。社会福祉士、精神保健福祉士の資格を有している。

当時の精神科クリニックのSWerの役割について「一緒に伴走するみたいな人」「その人の人生に寄り添う」イメージを持っていたが、「当時はどうしたらいいのかわからなかった部分がたくさんあった」。しかし、5年目ぐらいに北米へ研修に行き、「対象者の方の希望や夢に沿って、やって行けばいいんだっていう。とってもシンプルな、ああそういうシンプルな考え方でいいんだ」と見えたとき「あそこを軸にしたらいい」と「ストンと落ちた」そうだ。

施設は立ち上げ時（地域生活支援センター）から対象者を絞らない方針でスタートし、現在は、主に精神障害者としているが、発達障害や知的障害を合わせ持つ利用者也受け入れている。

A氏の地域の社会資源を見渡すと、様々な対象者を受け入れるのは、地域のニーズと言える。

【地域性のとらえ方】

地域性と利用者について、大都市から赴任した精神科医の話として「大変な人が多い」印象、例えば、統合失調症の人でも家庭環境の大変さ、発達障害や知的障害を合わせ持つ、大都市に出たが、馴染めずに戻ってきた人など、さらに東の地域では、経済的に厳しい大変なケースがあると聞くという。

地域特有のストーリーについて聞いたところ、地域の南北で、北は、1970～80年代に精神科病院が開放化を進め、全国的にも注目された。地域移行のリストをあげたところ、長期入院者数

は南が多く、北は少ない。

大都市の精神科クリニックと現在の地域性の違いについて、

「都会のほうが、家族がそれぞれ核家族化していたり、家族の世帯によってこういう絡みがあって大変っていう感じのケースは、もしかしたら割合として少なかったのかなっていう気はします。田舎の方が、そうですね、やっぱり家っていうのが都会よりも大事にするというか、本家とか、ね、自分は長男やからとか、なんかそういう意識が高い、都会よりも強いっていうのはあって、今なんかやっぱりこう、一番なかなか難しいケースが多いなって思うのは、病気になって実家に戻って来たり、その実家から離れることができず、そこで両親とだけの家族やったらまあいいんですけど、兄弟が新たな家族を持っていたりして一緒に生活するっていうのもけっこうあって、そうなると親が亡くなったり、親の力がなくなったときに、その兄弟との家族との軋轢というか、が大変になってきたりします」ととらえている。

兄弟が亡くなり、その妻が残るケースがあり、妻は「どうして面倒をみるのか」、本人は「自分が家を守る」の思いがあり、A氏はどちらの思いもわかるために「どこで折り合いを付けるのか、どう整理するのかっていうのが、すごく悩むことがある」という。

【地域での実践活動】

A氏の実践活動について、地域移行支援の事例から、

「外泊の練習をするときからやっぱり、ちょっとご近所にはお話しせざるを得ないこともよくあります。でもまあ、わあわあと大変になっている時期から、うちが係わっている場合は、何かあったらうちに連絡くださいって言って、直接、本人さんや家族に負担が行かないように、何ができるわけでもないんですけど、連絡もらって、あ、すみませんねって言いながら、なんだかまあ、言う先がないからとても不安っていうのも、ご近所があったりするんで、ま、そこはいったん受け止めて、入院して治療して良くなったときに、こんなふうになれたのですよという姿を見てもうしかないなと思って、その仲介というか、っていうことはしますね。」

周囲（地域への）支援として、

「（自分の）家だから帰る、家だからね、帰っていいでしょって思いながら、（周囲に）支援体制組みますから、っていうのは必ず言いますね。やっぱりその状態悪いと違って、まだぜんぜんサービスが入ってなかったり、家族だけで何とかしようと頑張っておられたりしたので、これからは違うんですと、ヘルパーさんも来ます、訪問介護も来ます、私たちも目配りしますし、24時間電話対応します、みたいなことを一応言うと、それ以上のことはあまり言われなかな。サービスが入ってからの彼を見てください、っていうふうに」伝え「本人がいい状態でおれるためにしていいたらイコール地域のためになる」ととらえているという。

本人に対する地域のかかわりについて、

「そうですね、なんとなく気にしてくれていますね、ご本人さんは体調が良くなったら、挨拶もされていい感じでいらっしゃいますし、まあ、挨拶かわしたりとか、ごみ出しがわからなかったら教えてくれたりとか、散歩していたら声かけてくれたりとかかなあ。ま、すぐ隣りより、ちょっと離れたところの人のほうが、

「なんとなくやんわりと見てくれているのかもしれない」

と地域のかかわりを述べている。疾病や障害を持つ前から本人が地域で生活していたこととの関係について問うと、

「かもしれませんね、近所からの反対とかそういうことはなくて、むしろご兄弟が心配をしてなかなか家に帰れなかった長期入院の方いらっしゃったんですけど、その方の場合なんかやったら、ご近所はむしろ、お兄さんが10何年かぶりに帰って来て、挨拶したら、よう帰ってきたなあ、って言って、本人さんもその村の集まりに、寄合とか集まりに出たりとか、お祭りに出たりとか、そういうことをスッとされるようになった」

と地域よりも家族の世間に対する目が、地域に戻れない一因ととらえている。

A氏の地域では、専門職の他に区長、民生委員が地域での見守りをしており、専門職と区長、民生委員の意見の相違が生じ、調整が難しいケースもあるという。方向性を決定する際に、本来は、「本人の意見を一番にしたいところですけど、それだけではどうにもならないところがある」と、何となく周囲で合意形成するという日本的なやり方がみられるようだ。

A氏は地域の包容力を、将来的に「あまり明るくない」と感じているが、ピアサポーターが民生委員に対して体験を話す場を積極的に作っている。居住支援研修会を開催し、福祉関係者だけではなく、不動産業者にも参加を呼び掛け、顔を見える関係を作っている。

これらの活動から、従来の地域のつながりを活かしながら新たな地域のつながりの仕掛けをしているSWerの姿が浮かび上がってくる。

【支援困難事例】

支援困難例のイメージについての問いに、

「私は…ケース自体ではあんまり思わないですね、難しいケースはありますが、こういう方向で行ったらいいな、と思っていてもなかなか本人さんはぜんぜん違う方向だったりとか、もうどうしようもなく、医療が入っても崩れていく人とか、やっぱりそういう難しいケースはもちろんあるんですけども、なんかでも、どうしようもないこともあるなって、さっさとあきらめているわけではないんですけど、そこはちょっと距離を置くようにしているんです。なにが支援困難かってやっぱり、関係者とのあれかな、そこが一番かなあ、と思います」と述べている。

2. B氏の実践活動

【B氏のキャリアと業務】

B氏は地域包括支援センターの管理者であり、行政の福祉課の管理職である。看護師としてキャリアをスタート、保健師として保健所、健康福祉事務所、児童相談所等の非常勤、子育ての時期を経て、行政の保健師として採用された。2002（平成14）年に基幹型在宅介護支援センター、2006（平成18）年に包括支援センターの立ち上げ、2010（平成22年）から障害部門へ異動、そし

て、2016（平成26）年からは社会福祉士として現在の勤務。看護師、保健師、介護支援専門員、主任介護支援専門員、社会福祉士、相談支援員の資格を有している。

【地域性のとらえ方】

B氏の勤務する地域は、3つの町が合併し、合併前、B氏は、海側の町の保健師をしていた。高齢化率は30%台の漁業と水産加工が産業の町、漁師気質で「裏がない人」が多い。他の町は農業や林業が産業であり、高齢化率が40%を超え、「おっとりとした人柄」の人が多いという。

地域的に昔からの住民が多く、海側は、船員や加工業の人の移住があったが、最近、山側の人が、都会から嫁いでくる人は多い。また、外国籍の女性が嫁いでおり、「よそからの人の受け入れはよい」地域である。他所からくる人の受け入れに対して「はっきりものを言う人もあるんですけど、比較的うちに秘めるっていうのが、そういう人たちが多いような気がしますので」ととらえている。

福祉サービスの利用に「自己主張してもっと私の権利を主張してっていうタイプの方もあれば、出来るだけ自分でやりますからとか、っておっしゃる方もあって、もうちょっとサービスとかでも使われたらいいのになって思っても使わない方もあります」と述べている。

【地域での実践活動】

B氏は、地域包括支援センターの他、福祉課の管理職として、職場内外の専門職の相談を受け、動くことが多いという。

精神障害者の兄と発達障害が疑われる弟のケース、親の年金で生活をしている老親と息子のケース、障害のある兄と同居の生計者である弟が病に倒れたケース、高齢の認知症の妻とサービス拒否を続ける夫のケースなど、「綱渡り」と感じるようなケースが多い。

例えば、高齢夫婦のケースでは、サービス受入れ拒否する夫に救急車両を呼ぶ事態が起きたとき、区長、老人会会長、民生委員も心配して駆けつけたが、夫は、その人たちを全く信頼しない。妻の認知症が進み、夫が何度も救急車両を呼ぶ事態になっても、ヘルパーも拒否。B氏が頻回に訪問し、繰り返し夫に話す拒否。その後、夫の体調が悪くなり、区長、民生委員が通院の手助けを行ったが、サービス受入れ拒否は継続。夫が入院した際、区長は毎日、訪室し、本人の通院代行まで請け負った。入退院を繰り返す夫の体調、妻の認知症や生活状況で施設入所が提案されたが、決定間際に夫が覆し、自宅で生活している。

「できたらやっぱり本当に施設に入ってもらえたら、ケアハウスとグループホームと申込みをされたときに、なんかこうもうやっとなんか私は安心できるって思いましたけど、でもやめたって本人が言ってしまったので、もう仕方がないなって」、妻へのネグレクトとして対応できそうなケースでもあるが、「たぶん、地域の人が、なんかがあったらまたすぐ電話してこられるなって、まあでも、なんかあるとすぐ電話して来られるんで、来てって言われるから、わかりました。うちの職員ももう電話かかって来たら、かかって来ましたって言うから、私がどこにいても捕まえられて行くんですけど」と述べている。

高齢夫婦のケースのように地域のつながりで支えられているのかと問うと、

「ケースバイケースですけど、でも誰か本当に助けてくださる方はあるかなと思いますけれどね、だれぞかれぞ、なんか」という。

あるケースでは、過去の親に対する子どもたちの思いがあり、「子どもたちは死んだら教えてくれて言うけれど、でも相談に行くとちゃんとのつてくれるんです、相談には、動いてはくれないですけれどね、なかなか、だから、だれぞかれぞ、なんか助けてくれる人が生まれて来るなって思っているんですけど」と語られた。

行政、公的なサービスしか導入できないケースもあるかと問うと「介護保険でっていうのも、よく言われたりして、行政がすればいいじゃない、って言ってよく言われることはあります。でも、行政が出来ることだって限界あるよねって言って、ちょっと区長さんに相談に行ってみて、だれか知りませんか？って言うてみようって言うてみたり。この方の状況が気になるんだけれど、って言うたりすると、だれぞかれぞ助けてくれたりして」と切羽詰ることが多く「もう…」と思っているところに、誰かが登場する。「無理はしないんだけど、できることがあったらするで、っていう、無理してまでってことはされないんですけど」の土地柄であるという。

一方、地域の見守りを「鬱陶しい」と感じている住民はいないかと問うと、認知症を疑われる一人暮らしの高齢者に本人の了解を得て、都会に住んでいる子どもに連絡したら、「認知症と決めつけている」と怒った子どもが本人を知らない間に連れて出て行った事例もある。区長をはじめ、関心を寄せていることが、監視されていると感じがするのかもしれない。「遠方にいる子どもさんがなかなか理解してくれないとか、介入してくれないというところで今、苦戦はしています」「本当、当事者さんがどうしたかったのかなって、そこのとこに思いを向けてあげていただけたら良かったのになってという事例はちょこちょこあります」という。

行政もケアマネジャーもヘルパーも社会福祉協議会も疲弊するようなケースも「その区長さんやら一部の人が何とかサポートしてくれていて、行政も介入していて、みたいなので折れる（受入る）おばあちゃんとかね。やっぱり、地域、地域があるかもしれませんね」と語っている。

そういった地域の雰囲気を見捨て、行政が先に方針を出すと軋轢が生まれないかと問うと「そうですね。そういうふうに、たぶんしたことがないんだと思います。ま、したことがない、どうしましようかっていう姿勢で行くので」と述べられた。

そして、民生委員の定例会に、全職員、とくに、ケアマネジャーが参加するようにしており、地域へ出向いた際には区長、民生委員に声かけをしている。他所から来た職員にも慣れた職員と一緒に同行して、地域とのつながりのやり方を教えている。その他、新聞、牛乳販売店からも情報が入ってくる。

地域での見守りも介護予防の方で体操サークルを作り、訪問するばかりでなく、仕掛けづくりをしている。また、生活支援の整備事業では「高齢者さんと言えども、してもらえばっかりではなく、まだこれは大きな課題ですけど、できることは少しずつして行きましょう、私の出来る事をして行きましょ

うってというようなのを、これから根付かせていきたいなと思っています」と話された。

【支援困難事例】

支援困難事例について、

「支援困難事例ばかりだと思っていますけど、どうしようと思っていると、だれかが助けてくれるので、何とかなっているかなと思うんですけど、まだ、現在進行形の人もたくさんありますが、なんかだれかがなんかの役割を担ってくださって支援してくださっているの、いつもしんどいんですけどね。」

Ⅱ SWerの実践活動からみる文化的特性について

2人のSWerの実践からみえてきたのは、実践する地域特性や文化を理解し、それらを活かした実践活動を行っている姿である。

A氏は、地域に「家」や「家長制度」が残っていると実感しており、地域移行支援や支援において、本人と家族の意向の違いの調整に苦慮すると述べている（波線部分）。利用者より家族が「世間の目」を意識して、地域移行や退院の妨げにもつながっている。B氏が職場内外から相談を受けるケースは、きょうだい、親子、夫婦が同居して生活しており、それは、B氏の言う「綱渡り」の生活であり、バランスが崩れれば、彼らの生活は維持できなくなり、利用者個人だけではなく、家族を単位とした介入が求められるケースである（波線部分）。

それは、林（2018）が医療機関での退・転院支援において「理想的には、利用者である患者の意思が最優先されるべきであるが、患者と家族の協働決定または家族の意向によって退・転院先が選定されている事例が少なくない」とし、ソーシャルワークの原則である利用者の自己決定のみを求められないと指摘していることと相通じる（林 2018: 28）。A氏も本人の意見だけではどうにもならない部分と述べている（点線部分）。そこには、今泉（2003）の「欧米人の個を中心とした主体性の形成と、対人的な関係の中で穏やかな主体性を形成する日本人」（今泉2003: 54）の特性が読み取れる。

また、利用者と地域との関係性に着目すると、A氏は、利用者がもともと暮らしていた地域で暮らせるよう専門職の介入を地域に伝えており、周囲も何となく気にかけている、それらの地域の文化を理解した実践である（点線部分）。B氏も、リスクの高いと思われるケースでも「何かあったら連絡をしてくれる」という緩やかに地域が見守る文化を活用している。そのために区長、民生委員に「お伺いをたてる」「お願いする」関係性を大切にしており、専門職も同じ地域での住民であり、生活者であるという視点も加わっていると思われる（点線部分）。

それは、空閑（2013）の日本人が「世間」という生活世界に生きる個人であり、つながりや関係が織りなす「場」によって、自らが生活の主体として支えられると論じていることを表している（空閑 2013: 85）。

A氏、B氏ともにもともとある地域性を活かしながら実践を行っているが、その一方で、危機感も感じ、あらたな取組みを導入し、地域のつながり作りも試みている。

今回は、2人のSWer実践から、わが国の文化的特性の一端を考察したが、さらなるSWre実践の集積と分析を行うことにより、ソーシャルワークの普遍性、共通性とその地域や国の文化を活かしたソーシャルワーク理論の構築に発展すると考える。

Ⅲ 「場所」概念で考える実践活動と文化的風土

2人のSWerの実践を「個人：環境：場所の交互作用」という視点から検討を試みる。「場所」は個人と「環境」の交互作用を成立させる基盤である。「場所」において個人は人間環境、社会環境、自然環境と具体的な関係を築く。「場所」では生活が蓄積され、歴史や文化や価値が創られ、一つの世代から別の世代へと伝え渡される。「場所」には「時間」的要素が組み込まれている。

2人のSWerが実践する場所は、農林水産業を生業とする人々が多い地域で、長期居住者がいて安定を保っている伝統的地域である。しかし、漁業や観光業に従事するために新たに転入してくる方も一定数いる。SWerは「昔からの人のほうが、やっぱり断然多い」が「固定的な状態だけの社会じゃないって感じ」「よそからの人の受け入れは良いと思います」と述べて、「手はよう出さんけど…」「人のことがちょっと気になる」と考える人たちがいることを地域の特徴に挙げている。

2人のSWerはその人が望めば、暮らしてきた「場所」で生活を存続できるように支援している。たとえば精神疾患のために10年、15年と長期間入院した後に、彼／彼女が入院前に暮らした場所に、もう一度、居場所を作り出す地域移行支援を行っている。その際、SWerはその「場所」に流れている「時間：環境」を支援に生かしている。たとえば、彼／彼女と近隣の人々が経験した発症前の時間、発症時の時間、「こんなに良くなったのね」という現在の時間を活用する。ソーシャルワークの実際は、上述した「A氏・B氏の実践活動」に詳述した。

環境の中に居場所を確保した後の「個人：環境：場所の交互作用」はどのようなものであろうか。SWerは環境に積極的に働きかけ、変化を目指すというよりも、むしろ環境に任せているように思われる。リスクへの対応策を講じた上で、SWer自身も環境に身を任せているようにみえる。そこには「個人：環境：場所の交互作用」に対する強い信頼が見て取れる。困ったなと思ったことに会っても「だれぞかれぞ、なんか助けてくれる人が生まれ出てくるんな、と思っている」というSWerの発言は、「地域は資源に満ちている」というストレングスの視点に通じる。これは、あがままに任せる無策と同じではない。地域の包容力や「なんとなく気にし合う」「無理はしないんですよ、でもね、みんなできることがあったらする」などの地域の特徴や文化は、今後、弱まったり変化したりする感触を2人のSWerは感じており、地域の新たな繋がりを創る取り組みを進めている。

今回は2人のSWerの実践を「個人：環境：場所の交互作用」の視点から検討し、文化的特性

とソーシャルワークを考察した。文化は特定の社会や集団の人々の間で学習され、世代を通じて伝わってきた風習、伝統、思考方法、意識、行動様式、価値観などの総称である。違う場所には違う時間が流れており、固有の環境が成立してゆく。2人のSWerの実践を近畿地方の日本海側の「自然環境」との交互作用の視点から検討することは今後の課題である。

*本稿は、平成29年度淑徳大学学術研究助成費の成果の一部である。

【注】

1) 2015 (平成27) 年国勢調査.

【文献】

- 林祐介 (2018) 「患者と家族の退・転院先の意向についての量的研究—A病院のカルテ・ソーシャルワーク記録調査より—」『社会福祉学』(日本社会福祉学会) 59-1, 27-39.
- 今泉礼右 (2003) 「ソーシャルワークと日本文化に関する一考察」『社会学論叢』(日本大学社会学会) 146, 39-58.
- 小島蓉子 (1992) 「実践における生態学とは？」カレル・ジャーマイン他著『エコロジカル・ソーシャルワーカーカレル・ジャーマイン名論文集』学苑社, 221-224.
- 空閑浩人 (2013) 「『場の文化』に根ざした社会福祉援助に関する研究—ソーシャルワークにおける『生活場モデル (Life Field Model)』の構想—」『評論・社会科学』(同志社大学社会学会) (108), 69-88.
- 岡本民夫 (2014) 「日本におけるソーシャルワーク理論と実践—過去・現在・未来—(その1)」『ソーシャルワーカー』(日本ソーシャルワーカー協会) 13, 1-8.
- Rapp, C. A., & Goscha, R. J. (2011) *The Strengths Model*, 3rd Ed., Oxford University Press. (= 2014, 田中秀樹監訳『ストレングスモデル—リカバリー志向の精神保健福祉サービス』金剛出版.)